ヴァージニア・ウルフの『燈台へ』

—言語への失望・沈黙・そして言語への新たなる試み—

河　口　伸　子

[**キーワード**：① 言語への失望；② 男性に支配された言語；③ 沈黙；④ 女性と言語との関係；⑤ 意味による呪縛からの解放]

序

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) は，彼女のほとんどの作品で「言語」の問題を取り扱っている。その中でも『燈台へ』(To The Lighthouse) は，ウルフの言語に対する考え方を理解する上で大変興味深い作品と言える。このことは，Stevie Davies がこの『燈台へ』の主題を「言語」であると述べているところに象徴的に示されている[1]。この論文ではこの『燈台へ』に焦点をあててウルフの最大の関心事である「言語」について考えてみたいと思う。

I. 言語への失望

この作品の中で，言語に関心を抱いているのは，ラムゼイ夫人 (Mrs. Ramsay) と画家であるリリー・ブリスコー (Lily Briscoe) である。彼女

達はどちらも言語に不信感を抱いている。

まず，ラムゼイ夫人であるが，彼女は自分の感じていることを言葉はありのままに表してくれないと感じている。夫であるラムゼイ氏 (Mr. Ramsay) に対する愛情を言葉にしてしまうと全く違ったものになってしまうことを知っている彼女は，決して夫に言葉で愛を告げようとはしないのである。

> …she never told him that she loved him…. It was only that she never could say what she felt[2].

ラムゼイ夫人は他の場面でも言語に対して同じような感情を抱いている。ラムゼイ夫人はラムゼイ家の別荘に集まったゲストや彼女の家族と共に夕食をとりながら，今までばらばらであった彼らのうちに，彼女が切望していた「調和」を作りあげることに成功する。彼女はその勧喜の瞬間の気持ちを「言葉で表わすことなどできない，いや言葉で表わす必要などない」と確信している。("Nothing need be said; nothing could be said." (163))

また，リリーは言語には意味があるという，シニフィアンとシニフィエの構造を持った言語のあり方に対して率直に疑問を持っている。リリーは "And to those worrds, what meaning attached, after all?" (42) と述べ，言語という記号をみればそれを機械的に一つの意味と結びつけてしまう構造に疑問を投げかけている。だが，リリーはそればかりではなくこのような構造に対して嫌悪の念を持つようになっている。彼女は，美しい夕べを言語を媒介にして描くと，その美しい夕べは語に付随している一つの

意味に「縮められ，引き下げられてしまう」ことに気づいている。このことは，“reducing” (41) という言葉によって象徴されている。また，彼女は生き生きとした状況が言葉になると「堅苦しい」(“angular” (41)) ものと化してしまうとまで述べている。このように言語に対する不信感をつのらせてきたリリーは，遂に次のように言語への失望を告白する。

> she wanted to say not one thing, but
> everything. Little words that broke
> up the thought and dismembered it
> said nothing…. Words fluttered
> sideways and struck the object
> inches too low. (274)

ここでリリーは言葉によって自分の思いを表現しようとしても，その思いと言葉の間には必らずギャップ，ずれが生じる，言葉では自分の感情をありのままに表現することができないことをはっきりと認識している。リリーが欲しているのは，「神経のうける衝撃，何かになる前のそのもの自体」(“that very jar on the nerve, the thing itself before it has been made anything.” (297)) なのである。ここで「何かになる」といっているのは，「感情や事物が言語になって描写されること」を示していると考えられる。つまり，彼女が芸術家として切望しているものは，「言語になってゆがめられて描写された感情や事物ではなく，ありのままの感情や事物それ自体」なのである。ここでリリーは言語によっては，自分が芸術家として求めているものを手に入れることができないとはっきりと述べているのである。この一節は，リリーの言語に対する決別を宣言したものと言える。そして

この一節, "the thing itself before it has been made anything." は, 我々にウルフの日記のある一節を想起させる。ウルフは, 『燈台へ』の第三部を執筆中, 言語について次のように書いている。

> Suppose one could catch them [one's thoughts] before they became 'works of art'? Catch them hot & sudden as they rise in the mind—walking up Asheham hill for instance. Of course one cannot; for the process of language is slow & deluding[3].
> (下線は筆者による)

作家であるウルフが常に求めているものも, やはり人の心に湧きおこったありのままの感情をとらえることである。作家であるが故にウルフはそれを言語を媒介として描き出し, 「芸術作品」にしようとする。しかし, このウルフの試みは言語の持っている「ゆっくりさ」と「虚偽性」("slow and deluding") のためにうまくいかないのである。ウルフは自分が作家として希求しているものが, 彼女の唯一の表現手段である言語によってうまく描き出すことができないことを実感して苦悩している。明らかにこのウルフの言語に対する諦め, 失望がリリーにそしてラムゼイ夫人に反映されている。

だが, ここで我々は大事なことに気づかなくてはならない。それは, 言語に対して失望, 不満を抱いているのは, 作者であるウルフもそうであるが, 女性ばかりであることである。それでは, 何故女性は言語に対してこ

のように不満を感じるのだろうか。まさに，これは，女性と言語との間にある根本的な問題から生じているのである。ウルフは『自分だけの部屋』(A Room of One's Own) の中で女性と言語との関係を次のように述べている。

> …there was no common sentence ready for her [a woman's] use. That is a man's sentence: behind it one can see Johnson, Gibbon and the rest. It was a sentence that was unsuited for a woman's use[4].

ここでウルフは言語を男性に支配されたものと定義し，それでは女性が自分の思いを表現するためには，全く不適当であると断言している。そしてその男性によって支配された言語を「不十分な道具」("inadequancy of tools")[5] とまで述べている。Rachel Bowlby も，男性の所有する言語と女性が自分のために欲する言語との間にくいちがいがあることを指摘し，女性の言語との関係の苦悩を言及している[6]。このような観点からみて，リリーとラムゼイ夫人には，男性の言葉しか持たない女性の言語への失望が象徴的に描き出されているとも言える。

II. 沈　　黙

自分の思っていることを言葉にしてしまうと，それは歪められ全く違ったものとなってしまうことを身にしみて感じているリリーとラムゼイ夫人

は，言葉を使って自分の気持ちを表現することを拒否するようになる。そして彼女達は言葉よりも沈黙に意義を見い出すようになる。言葉を使って自分達の感情を歪めてしまうことに耐えられなくなった彼女達は沈黙の中に安らぎを感じるようになる。

> Mrs. Ramsay sat silent. She was glad, Lily thought, to rest in silence, uncommunicative: (264)
> (下線は筆者による)

だが，彼女達にとって沈黙は言語から逃れるための手段でしかないわけではない。沈黙は，虚偽の言葉を使わずに互いに自分の心からの気持ちを意志伝達する積極的な手段なのである。Patricia Ondak Laurence は，沈黙を "wordless communication" と言及し，沈黙の価値を積極的に認めている[7]。ラムゼイ夫人は夫に対してこの積極的な意味での沈黙を駆使する。I で述べたように，ラムゼイ夫人は夫に愛していると言葉で告げることはしない。最初は，夫であるラムゼイ氏は妻のことを「無情な女」("a heartless woman" (190)) と非難していたが，いつの間にかラムゼイ氏は夫人の沈黙の中に自分への愛を理解するようになる。

> Then, knowing that he was watching her, instead of saying any thing she turned, holding her stocking, and looked at him. And as she looked at him she began to smile, for though

she had not said a word, he knew, of course he knew, that she loved him. He could not deny it…. "Yes, you were right. It's going to be wet tomorrow." She had not said it, but he knew it. (190-191)
(下線は筆者による)

Ⅲ. 言語への新たなる試み

確かにラムゼイ夫人やリリーは言語に失望して沈黙へと救いを見い出しているが，彼女達は完全に言語との取り組みを諦めてしまっているのだろうか。

実際に，言語に失望した芸術家リリーは言語との取り組みを断念し，絵画へと焦点を移している。このように言語に失望し，絵画へと移行していくプロセスは，ウルフが英国の印象派の画家ウォルター・シッカート(Walter Sickert) について述べているところにも見られる。

Not in our time will anyone write a life as Sickert paints it. Words are an impure medium: better far to have been born into the silent kingdom of paint[8].

だがリリーとは違ってラムゼイ夫人は言語に新たなる可能性を見い出そ

うとしているように思う。これまでにウルフの女性と言語の考え方について様々な議論がなされてきているが，その中でも Sandra M. Gilbert の考え方がここでは役に立つ。Gilbert はウルフが『自分だけの部屋』の中で述べている女性と言語との問題を次のように解釈している。Gilbert によれば，ウルフは男性に支配された言語ではない，女性の言語を作りだそうとしていたのではなく，女性と言語との関係を改めようとしていたのだと言うのである[9]。明らかにこの，女性が男性の支配している言語との関係を改めようとする動きを我々はラムゼイ夫人に見い出すことができる。Iで述べたように，言語はシニフィアンとシニフィエの構造を持った記号として考えられているが，ラムゼイ夫人はまず手初めとしてこういった画一的な言語の見方を捨て去ろうとしている。このことは，ラムゼイ夫人が「その言葉が何を意味しているのかわからなかった。」("She did not know what they [the words] meant." (171)) という一節を何度も繰り返し述べていることに表われている。このようなラムゼイ夫人の，言葉を意味の呪縛から解放するという考え方は，まさに作家ウルフの目指していたものでもあった。ウルフは，"Craftmanship" というエッセイの中で意味に縛られた言語の状況を次のように述べている。

> Perhaps then one reason why we have
> no great poet, novelist, or critic
> writing today is that we refuse
> words their liberty. We pin them
> down to one meaning…. And when
> words are pinned down they fold
> their wings and die[10].

つまり，ウルフは言葉は人間によって使われる際，一つの意味に縛りつけられてしまうために，言葉が本来持っている力を発揮できずに自由を奪われ，意味におしつぶされ死んでしまっていると現在の言語の状況を嘆いている。Edward Bishop も言及しているように，ウルフは言語には無尽の可能性があることに気づいていたのである(11)。そしてその可能性をだいなしにしているのは，人間の，言葉を一つの意味に縛りつけるという使い方なのであるとウルフは説いている。そしてウルフはこういった意味の呪縛から言語を解放しようとする。このウルフの欲望が，ラムゼイ夫人に反映されている。ラムゼイ夫人は言語を意味から解放することによって，コミュニケーションの手段として言語を用いるという今までの言語との関係ではなく，新たな言語との取り組み方を模索している。そしてラムゼイ夫人はみごとにそれに成功している。彼女にとって，言語はもはやコミュニケーションの手段としてのみ機能しているのではない。彼女は言語の別の要素を重視することによって，彼女が切に願っていた人々の調和を作りだすことに成功している。

> So, when there is a strife of tongues at some meeting, the chairman, to obtain unity, suggests that every one shall speak French. Perhaps it is bad French; French may not contain the words that express the speaker's thoughts; nevertheless speaking French imposes some order, some uniformity… and Mr. Tansley,

who had no knowledge of this
language, even spoken thus in words
of one syllable, at once suspected
its sincerity. (140)
(下線は筆者による)

明らかにここでは言語はコミュニケーションの手段としては用いられていない。このことは，「このフランス語は話し手の思いを表わす言葉など含んでいないかもしれない。」("French may not contain the words that express the speaker' thoughts") という一節に示されている。その上，ここでラムゼイ夫人の使っている言語が自分達の母国語である英語ではなく，外国語であるフランス語であるということは大変意義深い。英語を用いれば，どうしてもその語に付随する意味でその語を解釈してしまうが，外国語であれば，その言葉の持つ意味よりも，その言葉の「音」自体がまず一番に聞く者の耳に入ってくることができる。ここでフランス語を用いることによって，ラムゼイ夫人は今まで意味の後に追いやられていた，言語の最も根本的な要素である「音」を強調している。そしてそのフランス語が発する音やリズムが不思議にも人々を調和 ("unity") させているのである。ラムゼイ夫人は，言語の持つ音やリズムによって人々の間に調和をもたらすという言語の新しい側面，新しい可能性を開拓し，言語との新しい関係を切り開くことに成功しているのである。

このように，言語を意味の呪縛から解放し，言語の本来の要素である「音」自体に言語の新しい価値を見い出そうとするこのラムゼイ夫人の姿勢は，まさに男性に支配された言語に失望しながらも，その言語に新しい可能性を見つけ出そうとした女性作家ウルフの姿勢であると言える。そし

て意味の呪縛から解き放つことによって言語の自由を回復しようとするこの試みこそが,作家ウルフが全生涯を通じて希求していたものなのである。

(1) Stevie Davies, Virginia Woolf—To The Lighthouse (London : Penguin Books, 1989) 62.

(2) Virginia Woolf, To The Lighthouse (London : The Hogarth Press, 1967) 190. 以下『燈台へ』からの引用はこの版からとし，カッコ内にページ数をしるす。

(3) Virginia Woolf, A Writer's Diary (New York : Harcourt, Brace and Company, 1953) 93-94.

(4) Virginia Woolf, A Room of One's Own (London : The Hogarth Press, 1949) 115.

(5) Virginia Woolf, A Room of One's Own 115.

(6) Rachel Bowlby, Virginia Woolf—Feminist Destination (Oxford : Basil Blackwell, 1988) 28-30.

(7) Patricia Ondek Laurence, The Reading of Silence—Virginia Woolf in The English Tradition (Stanford : Stanford University Press, 1991) 43,

(8) Virginia Woolf, Collected Essays 4 vols. (London : The Hogarth Press, 1966) 2 : 237.

(9) Sandra M. Gilbert, "Woman's Sentence, Man's Sentencing : Linguistic Fantasies in Woolf and Joyce" in Virginia Woolf And Bloomsbury—A Centenary Celebration ed. Jane Marcus (London : Macmillan Press, 1987) 209.

(10) Virginia Woolf, Collected Essays 2 : 251.

(11) Edward Bishop, Virginia Woolf (London : Macmillan Press, 1991) 81.

学習院大学人文科学論集II (1993)

Virginia Woolf's *To The Lighthouse*
—The disappointment at language, silence and the new approach to language—

Nobuko Kawaguchi

Virginia Woolf deals with the problem of "language" in her many works. Among them *To The Lighthouse* is very interesting in understanding her idea of language.

It is Mrs. Ramsay and Lily Briscoe who feel great interests in language in this work. Mrs. Ramsay thinks that she is not able to express what she feels as it is by means of language and is dissatisfied with it. Lily also doubts about language as a sign with a meaning. In their disappointment Woolf's disappointment at language is reflected. Here we must notice an important thing. It is that only women feel disgusts toward language. Why are only women dissatisfied with language? In *A Room of One's Own* Woolf defines language used today as "a man's sentence", that is, language dominated by men and alludes that it is unsuitable for women's use. Judging from this view, we can say that Mrs. Ramsay and Lily are described as the symbol of women who are disappointed at language dominated by men. And Mrs. Ramsay and Lily come to refuse to use it and enter into the kingdom of silence.

But do they really give up their coping with language dominated by men? In fact, Lily does so, but Mrs. Ramsay tries to find a new possibility of language. Sandra M. Gilbert mentions that Woolf does not create "a women's sentence" but tries to revise their relations to language dominated by men. This attitude of revising the relation to language is shown in Mrs. Ramsay. Besides the conventional usage of language that we use words as signs with meanings, she tries to find a new relation to language. First she sets language

from meaning. She no longer uses language only as a means of communication. She focuses on the most essential element of language, "sound" which has been hidden behind meaning and in it she tries to find a new possibility of language. Finally she succeeds in creating unity she has longed for because of "sound" and "rhythm". Thus she finds the new relation to language by emphasizing "sound" and "rhythm", not meaning. We can conclude that her approach symbolizes Woolf's attitude as the woman writer who tries to find a new possibility of language while she is disappointed at it.

(学習院大学大学院人文科学研究科イギリス文学専攻博士後期課程満期退学)